

中学校の学級活動における生徒の思考の特徴に関する考察 —学級や学校における生活上の諸問題の解決の学習に着目して—

Characteristics of Student Cognition in Junior High School Classroom Activities

—Learning to Solve Problems in Class Life—

高橋 正年¹, 瀧ヶ平 悠史²

Masatoshi Takahashi³, Yuushi Takigahira⁴

Abstract

The purpose of this study is to consider the relationship between the customization of class consciousness of students and the types of solutions they use to solve class problems. The subjects of the survey were 37 second year junior high school students. The investigation was conducted using a survey to measure their attitude toward the class and how they tried to solve various problems in the class. Students who had a positive sense of attachment to the class, namely a sense of belonging, a sense of ownership, a willingness to cooperate, and a sense of responsibility could cooperate with each other, change their consciousness, and implement concrete solutions such as speaking up. Students who had a negative sense of attachment to the class, those who lacked a sense of belonging, a sense of ownership, a willingness to cooperate, and a sense of responsibility had the idea of relying on teachers and friends in order to solve problems.

キーワード：学級活動，学級の諸問題，思考の特徴

Keywords: classroom activity problems in class life characteristics of student thinking

¹ 東海大学国際文化学部地域創造学科,005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² 北海道教育大学附属札幌小学校,002-8075 札幌市北区あいの里5条3丁目1-10

³ Department of Community Development, School of International Cultural Relations, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo, 005-8601

⁴ Sapporo elementary school Attached to Hokkaido University of Education, 5-3-1-10, Ainosato, Kita-ku Sapporo, 002-8075

要 旨

本研究は、中学生の所属学級に対する意識の違いと、学級の諸問題の解決方法を考える思考の特徴との関係を事例的に明らかにすることを目的とした。調査対象は、中学校の第2学年の生徒1学級37名であった。所属学級に対する意識調査と学級の諸問題の解決方法の記述から分析を行い、得られた知見は次の通りである。

- 1 「自分の所属する学級が好きである」といった学級への愛着、「自分の所属する学級で果たす役割がある」という所属感、「学級で起きた問題をどうにか解決したいと思う」と考える当事者意識、「友達と協力して活動することには意味がある」と考える協調性、「学級の当番活動は責任をもって取り組む」という責任感に肯定的な意識をもつ生徒は、お互いに協力すること、意識の在り方を変えること、声掛けや人数を増やすなどの具体的な解決方法を考えることができること。
- 2 学級への愛着や所属感、当事者意識、協調性や責任感について否定的な意識をもつ生徒は、学級の諸問題の解決に向けて、先生や友達、代表生徒に頼ること、罰当番などのペナルティーを科すことによって解決しようとする考えがあること。
- 3 学級活動に関わらず、日常的に自分の考えを示すこと、伝えることを学校教育の中で推進していくことが学級活動における思考の促進には必要であること。

I 研究の背景と目的

中学生は主体性や協調性、責任感などの社会性が発達する時期であり、集団生活におけるルールやマナーの意義を実感し、内面的に大きく成長する時期である。しかしながら、思春期でもあることから人間関係のあつれきや、欲求やストレスが原因で、学級内で周囲に迷惑をかけてしまう時期でもある(2017, 文部科学省)。そのため、特別活動の学級活動においては、学級や学校での生活の充実と向上を図るために、そこで生じる生活上の諸問題について所属学級の生徒で話し合い、意見を出し合って解決の方法を検討する学級会活動が行われている。この学級や学校における生活上の諸問題において文部科学省(2017)は、生徒が自分たちで解決できることや、その課題を自分たちで見つける必要があることから、解決方法を話し合い、継続的に実践に取り組み、成果と課題を明らかにしていくことが求められている。そして、個人や集団と関わり合う中で、合意形成や意思決定を行い、課題解決の過程に必要となる思考力を育成することを目指すことが中学校学習指導要領に示されている(文部科学省, 2017)。しかし、学級活動の思考力育成に関しては、具体的な指導方法に関する研究は少なく、話し合い活動も生徒に委ねられている現状がある。石井(2015)は、教科等横断的な汎用的な思考スキルが協調されることについて、思考の硬直化・パターン化に陥るとし、学びを深めることが軽視されていることを示唆している。また、学級活動は、信頼に支えられた人間関係の構築を目指していることから、諸問題の解決方法を考えるにあたり、学級への愛着や所属感、友人との関係性や諸問題に対する当事者意識など、所属学級に対する意識や諸問題に対する認識の違いによって、解決しようとする意識や解決方法を考える思考力に影響するものと考えられる。

このような背景から、学級や学校における生活上の諸問題を解決する方法を考える

ことができる生徒の学級への意識の在り方と思考内容の関係を明らかにすることで、思考力に関する指導方法の手がかりを得られると考えた。そこで本研究では、中学校における所属学級に対する意識の違いと、学級の生活上の諸問題の解決方法を考える思考の特徴との関係を事例的に明らかにすることを目的とした。

II 研究の方法

1. 調査対象

調査対象は、札幌市の A 中学校の第 2 学年の生徒 1 学級 37 名（男子 19 名，女子 18 名）である。この学級は 2021 年 4 月に第 2 学年に進級した際に学級編成を行っている。

2. 調査学級の問題

調査学級は、4 時間目終了後の給食準備の開始や当番活動が遅いことや、時間内に給食が終わらず、昼休みが短縮されるという問題を抱えており、2021 年 7 月下旬にこの学級の問題を解決するための学級会活動を実施した。

3. 所属学級に対する意識調査

新たな学級となってから 3 か月後の 2021 年 7 月中旬に、11 項目の所属学級に対する意識調査（表 1）を実施した。この意識調査は、伊藤ほか（2001）によって作成された学級風土質問紙を参考に本調査のために作成した。所属学級に対する意識調査の選択肢は、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「ややあてはまらない」、「あてはまらない」とした。なお、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した生徒を肯定群、「ややあてはまらない」、「あてはまらない」と回答した生徒を否定群とした。

表 1. 所属学級に対する意識調査

No.	項目	内容
1	愛着	自分の所属する学級が好きである。
2	所属感	自分の所属する学級で果たす役割がある。
3	楽しさ	学級での生活は楽しい。
4	向上心	学級での生活をよりよくしたい。
5	仲間	学級の友達と仲良く生活している。
6	満足感	今の学級に満足している。
7	規範意識	みんなで決めたルールはしっかりと守る。
8	当事者意識	学級で起きた問題をどうにか解決したいと思う。
9	協調性	友達と協力して活動することには意味がある。
10	主体性	積極的に学級のお仕事をする。
11	責任感	学級の当番活動は責任をもって取り組む。

4. 生徒の思考の特徴

生徒は学級会終了後に学級の諸問題の解決方法を考えた。解決方法はワークシートを用いて自由記述とした記述した。この記述内容について、質的解析ソフト NVivo12 (QSR International) を用いて頻出語を抽出し、それらを図示化して思考の特徴を明らかにすることにより、所属学級に対する意識の違いと学級の諸問題の解決方法を考える思考内容との関係を整理することとした。思考の特徴の示し方として、村上ほか (2021) に授業中の発話記録から頻出語を抽出した研究を参考に、本研究においても思考の特徴を示す方法とした用いた。

5. 研究にあたっての配慮事項

本研究を実施するにあたり、対象校の校長に了承を得た上で、対象生徒の保護者への事前説明を行い、文書にて調査の目的、内容、プライバシーの保護、データの使用範囲、参加の拒否ができることなどについての説明を実施した。生徒に対しても事前に説明を実施し、データ収集や提供を断ることが可能であることを伝えて、同意を得た上で調査を実施した。なお、この調査は、東海大学「人を対象とする研究」(2021年度)に関する倫理委員会審査による承認を受けている (21123)。

III 結果

所属学級に対する意識調査のそれぞれの質問項目において、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した群を肯定群とし、「ややあてはまらない」、「あてはまらない」と回答した群を否定群とした。両群の学級の諸問題の解決方法に関する記述内容の特徴を示すため、群ごとに頻出語を抽出した。頻出語は、ワークシートの記述内容にみる2回以上検出された頻出語数を抽出した。「自分の所属する学級が好きである」(表2)、「自分の所属する学級で果たす役割がある」(表3)、「学級で起きた問題をどうにか解決したいと思う」(表4)、「友達と協力して活動することには意味がある」(表5)、「学級の当番活動は責任をもって取り組む」(表6)については、思考の特徴が顕著であった。また、この頻出語を回数が多い順に、中心かつ大きな文字で表示し、可視化したものが図1から図10である。

なお、各項目における肯定群と否定群の割合は、「自分の所属する学級が好きである」の肯定群 59.5%、否定群 40.5%、「自分の所属する学級で果たす役割がある」の肯定群 51.4%、否定群 48.6%、「学級で起きた問題をどうにか解決したいと思う」の肯定群 56.8%、否定群 43.2%、「友達と協力して活動することには意味がある」の肯定群 45.9%、否定群 54.1%、「学級の当番活動は責任をもって取り組む」の肯定群 62.2%、否定群 37.8%であった。

表 2. 「自分の所属する学級が好きである」の群別の頻出語数 (2 回以上の検出語)

肯定群				否定群			
順位	語	回数	割合	順位	語	回数	割合
1	お互い	19	5.59	1	先生	9	6.12
1	人数	19	5.59	2	友達	8	5.44
1	増やす	19	5.59	3	罰	7	4.76
1	声	19	5.59	4	事前	6	4.08
1	当番	19	5.59	4	代表	6	4.08
6	協力	18	5.29	4	時間	6	4.08
6	意識	18	5.29	4	注意	6	4.08
8	できるだけ	17	5.00	4	見張る	6	4.08
8	日直	17	5.00	9	お互い	5	3.40
10	友達	16	4.71	9	人数	5	3.40
10	手伝う	16	4.71	9	協力	5	3.40
10	給食	16	4.71	9	増やす	5	3.40
13	代表	15	4.41	9	声	5	3.40
13	全員	15	4.41	9	当番	5	3.40
13	朝	15	4.41	9	意識	5	3.40
16	時間	14	4.12	9	日直	5	3.40
17	事前	11	3.24	9	発言	5	3.40
17	交代	11	3.24	9	給食	5	3.40
19	結果	8	2.35	19	仕方	4	2.72
20	先生	5	1.47	19	手伝う	4	2.72
20	委員	5	1.47	19	無理	4	2.72
20	注意	5	1.47	19	遅い	4	2.72
23	特典	4	1.18	23	交代	3	2.04
23	発言	4	1.18	23	朝	3	2.04
25	おしゃべり	3	0.88	23	発表	3	2.04
25	順番	3	0.88	23	結果	3	2.04
27	いつも	2	0.59	23	関心	3	2.04
27	ほしい	2	0.59	28	できるだけ	2	1.36
27	発表	2	0.59	28	努力	2	1.36
				28	無責任	2	1.36
				28	責任	2	1.36

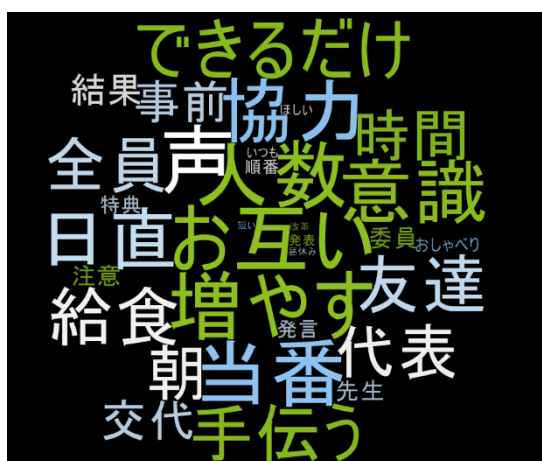


図 1. 「自分の所属する学級が好きである」の肯定群における記述内容の単語クラウド

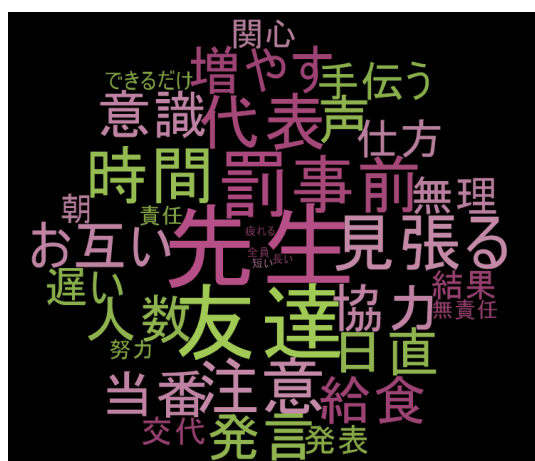


図 2. 「自分の所属する学級が好きである」の否定群における記述内容の単語クラウド

表 3. 「自分の所属する学級で果たす役割がある」の群別の頻出語数（2 回以上の検出語）

肯定群				否定群			
順位	語	回数	割合	順位	語	回数	割合
1	お互い	16	5.50	1	代表	9	4.59
1	人数	16	5.50	1	先生	9	4.59
1	増やす	16	5.50	1	友達	9	4.59
1	当番	16	5.50	1	声	9	4.59
1	日直	16	5.50	1	意識	9	4.59
6	協力	15	5.15	6	お互い	8	4.08
6	友達	15	5.15	6	事前	8	4.08
6	声	15	5.15	6	人数	8	4.08
9	できるだけ	14	4.81	6	協力	8	4.08
9	意識	14	4.81	6	増やす	8	4.08
9	給食	14	4.81	6	当番	8	4.08
12	全員	13	4.47	6	時間	8	4.08
12	手伝う	13	4.47	13	手伝う	7	3.57
14	代表	12	4.12	13	給食	7	3.57
14	時間	12	4.12	13	罰	7	3.57
14	朝	12	4.12	16	日直	6	3.06
17	事前	9	3.09	16	朝	6	3.06
17	交代	9	3.09	18	できるだけ	5	2.55
19	結果	7	2.41	18	交代	5	2.55
20	注意	6	2.06	18	注意	5	2.55
21	先生	5	1.72	18	発言	5	2.55
22	特典	4	1.37	18	見張る	5	2.55
22	発言	4	1.37	23	仕方	4	2.04
24	委員	3	1.03	23	無理	4	2.04
24	順番	3	1.03	23	発表	4	2.04
26	いつも	2	0.69	23	結果	4	2.04
26	おしゃべり	2	0.69	23	遅い	4	2.04
26	短い	2	0.69	28	全員	3	1.53
				29	努力	2	1.02
				29	委員	2	1.02
				29	無責任	2	1.02
				29	責任	2	1.02
				29	関心	2	1.02

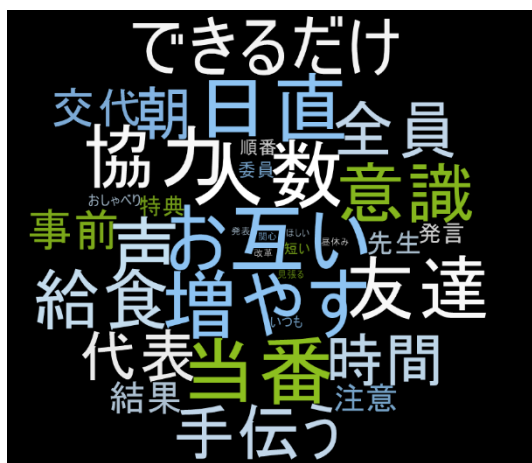


図 3. 「自分の所属する学級で果たす役割がある」の肯定群における記述内容の単語クラウド

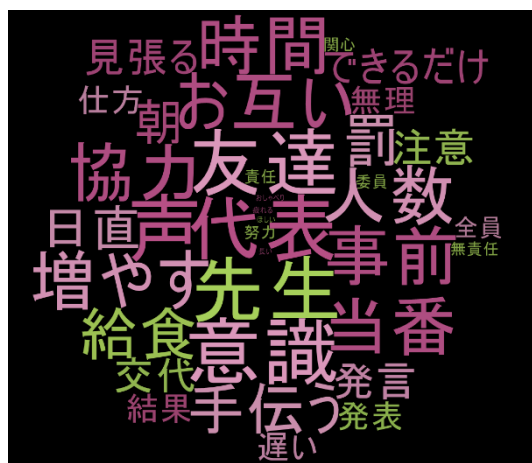


図 4. 「自分の所属する学級で果たす役割がある」の否定群における記述内容の単語クラウド

表 4. 「問題をどうにか解決したいと思う」の群別の頻出語数 (2 回以上の検出語)

肯定群				否定群			
順位	語	回数	割合	順位	語	回数	割合
1	当番	15	5.60	1	先生	11	5.02
1	意識	15	5.60	1	友達	11	5.02
3	お互い	14	5.22	3	お互い	10	4.57
3	できるだけ	14	5.22	3	人数	10	4.57
3	人数	14	5.22	3	増やす	10	4.57
3	協力	14	5.22	3	声	10	4.57
3	増やす	14	5.22	7	事前	9	4.11
3	声	14	5.22	7	代表	9	4.11
9	全員	13	4.85	7	協力	9	4.11
9	友達	13	4.85	7	当番	9	4.11
9	日直	13	4.85	7	日直	9	4.11
12	代表	12	4.48	7	時間	9	4.11
12	手伝う	12	4.48	7	給食	9	4.11
12	朝	12	4.48	14	意識	8	3.65
12	給食	12	4.48	14	手伝う	8	3.65
16	交代	11	4.10	16	注意	7	3.20
16	時間	11	4.10	17	朝	6	2.74
18	事前	8	2.99	17	罰	6	2.74
19	結果	7	2.61	17	見張る	6	2.74
20	委員	4	1.49	20	できるだけ	5	2.28
20	注意	4	1.49	20	発言	5	2.28
20	発言	4	1.49	22	無理	4	1.83
23	先生	3	1.12	22	結果	4	1.83
23	特典	3	1.12	22	遅い	4	1.83
25	おしゃべり	2	0.75	25	交代	3	1.37
25	発表	2	0.75	25	仕方	3	1.37
25	順番	2	0.75	25	全員	3	1.37
				25	発表	3	1.37
				25	関心	3	1.37
				30	努力	2	0.91
				30	無責任	2	0.91
				30	責任	2	0.91

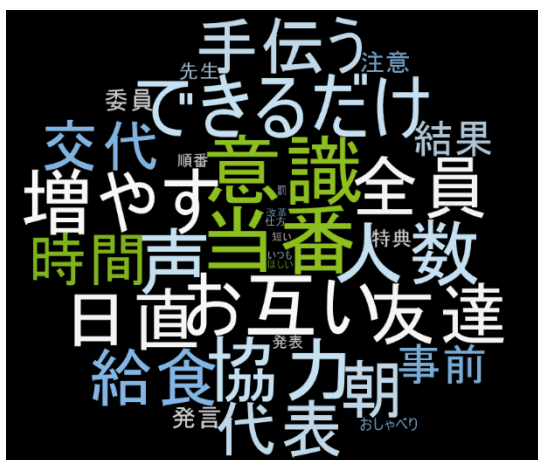


図 5. 「問題をどうにか解決したいと思う」の肯定群における記述内容の単語クラウド

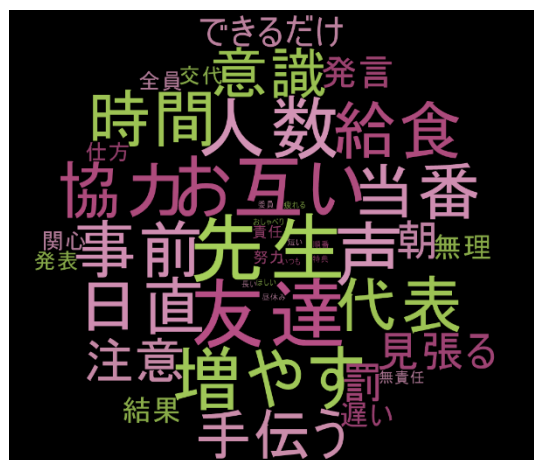


図 6. 「問題をどうにか解決したいと思う」の否定群における記述内容の単語クラウド

表 5. 「協力して活動することには意味がある」の群別の頻出語数 (2 回以上の検出語)

肯定群				否定群			
順位	語	回数	割合	順位	語	回数	割合
1	お互い	18	5.64	1	先生	9	5.36
2	協力	17	5.33	2	事前	8	4.76
2	声	17	5.33	2	人数	8	4.76
2	意識	17	5.33	2	友達	8	4.76
5	人数	16	5.02	2	増やす	8	4.76
5	友達	16	5.02	2	当番	8	4.76
5	増やす	16	5.02	7	声	7	4.17
5	当番	16	5.02	8	お互い	6	3.57
5	日直	16	5.02	8	代表	6	3.57
10	できるだけ	15	4.70	8	協力	6	3.57
10	代表	15	4.70	8	意識	6	3.57
10	時間	15	4.70	8	手伝う	6	3.57
10	給食	15	4.70	8	日直	6	3.57
14	全員	14	4.39	8	給食	6	3.57
14	手伝う	14	4.39	8	罰	6	3.57
16	朝	13	4.08	16	時間	5	2.98
17	交代	11	3.45	16	朝	5	2.98
18	事前	9	2.82	16	発言	5	2.98
19	結果	8	2.51	19	できるだけ	4	2.38
20	注意	7	2.19	19	仕方	4	2.38
21	先生	5	1.57	19	注意	4	2.38
21	委員	5	1.57	19	無理	4	2.38
23	特典	4	1.25	19	発表	4	2.38
23	発言	4	1.25	19	見張る	4	2.38
25	おしゃべり	2	0.63	19	遅い	4	2.38
25	短い	2	0.63	26	交代	3	1.79
25	見張る	2	0.63	26	結果	3	1.79
25	順番	2	0.63	28	全員	2	1.19
				28	努力	2	1.19
				28	無責任	2	1.19
				28	責任	2	1.19
				28	関心	2	1.19

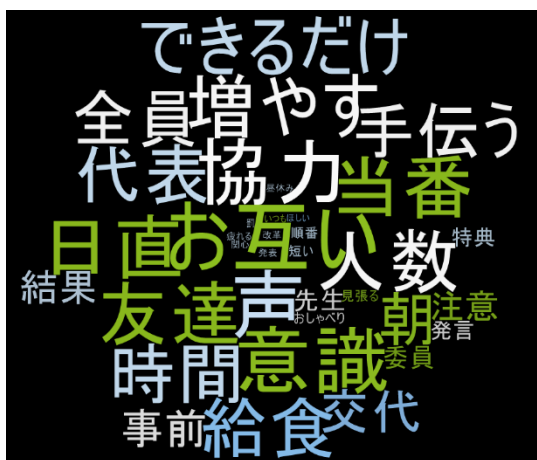


図 7. 「協力して活動することには意味がある」の肯定群における記述内容の単語クラウド

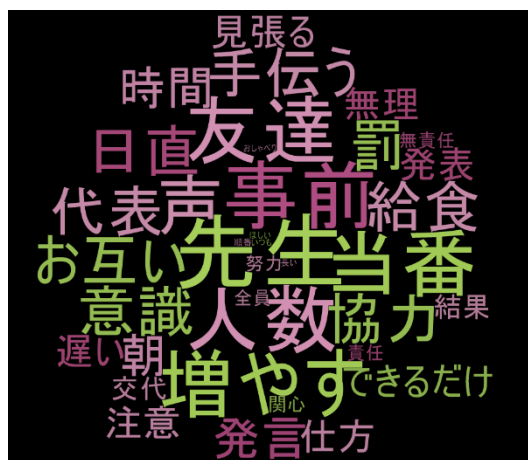


図 8. 「協力して活動することには意味がある」の否定群における記述内容の単語クラウド

表 6. 「学級の当番活動は責任をもって取り組む」の群別の頻出語数 (2 回以上の検出語)

肯定群				否定群			
順位	語	回数	割合	順位	語	回数	割合
1	お互い	17	5.78	1	先生	10	5.18
2	協力	16	5.44	2	人数	9	4.66
2	友達	16	5.44	2	代表	9	4.66
2	声	16	5.44	2	増やす	9	4.66
2	当番	16	5.44	5	友達	8	4.15
2	日直	16	5.44	5	声	8	4.15
7	人数	15	5.10	5	当番	8	4.15
7	増やす	15	5.10	5	意識	8	4.15
7	意識	15	5.10	9	お互い	7	3.63
7	給食	15	5.10	9	事前	7	3.63
11	手伝う	14	4.76	9	協力	7	3.63
11	時間	14	4.76	9	罰	7	3.63
13	できるだけ	13	4.42	13	できるだけ	6	3.11
13	全員	13	4.42	13	手伝う	6	3.11
13	朝	13	4.42	13	日直	6	3.11
16	代表	12	4.08	13	時間	6	3.11
17	事前	10	3.40	13	注意	6	3.11
18	交代	9	3.06	13	給食	6	3.11
19	結果	7	2.38	13	見張る	6	3.11
20	委員	5	1.70	20	交代	5	2.59
20	注意	5	1.70	20	朝	5	2.59
22	先生	4	1.36	20	発言	5	2.59
22	特典	4	1.36	23	仕方	4	2.07
22	発言	4	1.36	23	無理	4	2.07
25	おしゃべり	2	0.68	23	発表	4	2.07
25	順番	2	0.68	23	結果	4	2.07
				23	遅い	4	2.07
				28	全員	3	1.55
				28	関心	3	1.55
				30	努力	2	1.04
				30	無責任	2	1.04
				30	責任	2	1.04

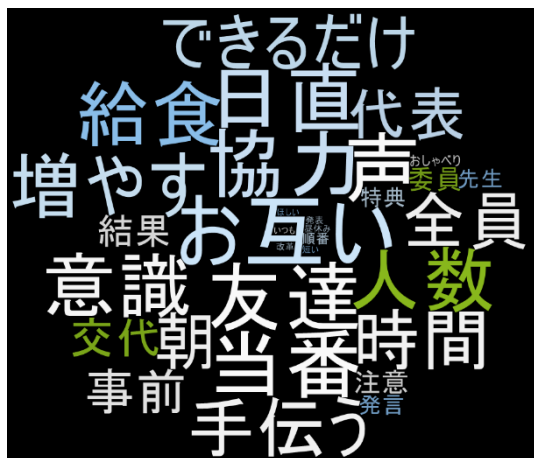


図 9. 「学級の当番活動は責任をもって取り組む」の肯定群における記述内容の単語クラウド

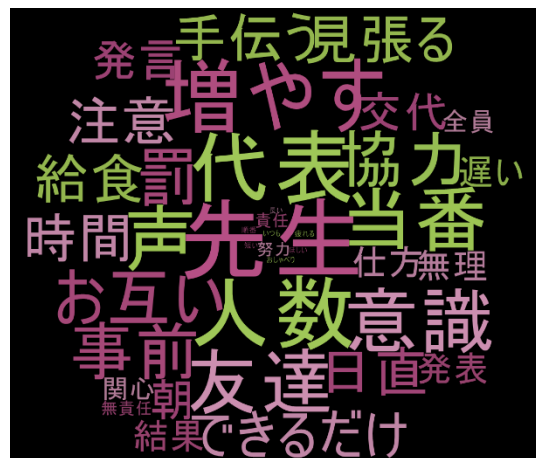


図 10. 「学級の当番活動は責任をもって取り組む」の否定群における記述内容の単語クラウド

なお、調査項目の「学級での生活は楽しい」、「学級での生活をよりよくしたい」、「学級の友達と仲良く生活している」、「今の学級に満足している」、「みんなで決めたルールはしっかりと守る」、「積極的に学級のお仕事をする」の6つについては、記述内容の頻出語について、顕著な違いが肯定群と否定群には見られなかった。

IV 考察

「自分の所属する学級が好きである」、「自分の所属する学級で果たす役割がある」、「学級で起きた問題をどうにか解決したいと思う」、「友達と協力して活動することには意味がある」、「学級の当番活動は責任をもって取り組む」についての肯定群には、思考の特徴は「お互い」、「協力」、「意識」、「人数」であった。「自分の所属する学級が好きである」といった学級への愛着、「自分の所属する学級で果たす役割がある」という所属感、「学級で起きた問題をどうにか解決したいと思う」と考える当事者意識、「友達と協力して活動することには意味がある」と考える協調性、「学級の当番活動は責任をもって取り組む」という責任感に肯定的な意識をもつ生徒は、学級の諸問題の解決に向けて、お互いに協力すること、意識の在り方を変えること、声掛けや人数を増やすなどの具体的な解決方法を考えることができると考える。一方、否定群に共通して見られた思考の特徴は、「先生」、「友達」、「代表」、「罰」であった。学級への所属感や当事者意識、協調性や責任感について否定的な意識をもつ生徒は、学級の諸問題の解決に向けて、先生や友達、代表生徒に頼ること、罰当番などのペナルティーを科すことによって解決しようとする考えがあることがわかった。

今回の調査のように、所属学級に対する意識の違いによって、学級の諸問題の解決方法を考えるという思考の特徴に違いが表れた理由として、生徒同士の間関係の状態が一つの要因として考えられる。林ほか(2020)は、安心して自分らしく生活できる学級が必要であり、お互いに認め合い、支え合い、高め合う人間関係の必要性を示している。また、松田ほか(2020)は、学級活動における合意形成や意思決定には、どの子の意見も受け入れられる支持的風土が必要であると述べている。加えて、青木(2019)は、自分の存在感が育まれるような話し合いの場や機会の設定が必要であるとしている。これら先行研究で述べられているように、学級活動は生徒同士の良好な人間関係の構築が基本となり、学級活動への活力や意識の高まりへとつながるものと考えられる。よって、学級への所属感や当事者意識、協調性や責任感について肯定的に捉えることができる意識を醸成できる学級指導が生徒の思考力を高め、学級活動の充実を支える要因となると考える。

また、学級活動における肯定的な思考の促進には、単発的な取り組みでは効果が得られないと考える。林ほか(2019)は、学級活動において行動変容等を見取るには継続的な評価などの取り組みの必要性を示唆している。また、田嶋ほか(2012)は、書くことや伝えることの継続、教科横断的な取り組みと学級活動における言語活動の充実の関係性を示している。このようなことから、学級活動に関わらず、日常的に自分の考えを示すこと、伝えることを学校教育の中で推進していくことが学級活動における肯定的な思考の促進には必要であると考える。

なお、本調査は、生徒の思考に与える他の要因も考えられるため、事例的な報告に留

まるものである。また、思考の特徴の調査の方法も多角的に捉える必要があると考える。今後、学級活動における思考の促進や指導に関する手がかりを得られる調査方法の検討が一層必要であると考えます。

V まとめ

本研究の目的は、中学生の所属学級に対する意識の違いと、学級の生活上の諸問題の解決方法を考える思考の特徴との関係を事例的に明らかにすることであった。学級の生活上の諸問題の解決方法の記述の分析から、学級に対して肯定的な意識をもつ生徒の多くは、学級の生活上の諸問題の解決方法を考える際、実行可能で肯定的な思考をすることができると思う。具体的には、お互いに協力すること、意識の在り方を変えること、声掛けや人数を増やすなどの具体的な解決方法を考えることができることが明らかとなった。一方、学級に対して肯定的な意識をもつことができない生徒は、先生や友達、代表生徒に頼るなどの当事者意識にかけることや、罰当番などのペナルティーを科すことによって解決しようとする考えがあることが明らかとなった。このようなことから、学級への所属感や当事者意識、協調性や責任感について肯定的に捉えることができる意識を醸成できる学級指導が、生徒の肯定的な思考力を高め、学級活動の充実を支える要因となると考える。

引用文献

青木一起 (2019) 合意形成能力の基礎を育む学級活動の実践—思考スキルを活用した話し合い活動を通して—。東海学園大学教育研究紀要, 5 : 4-13.

林尚示・安井一郎・鈴木樹・眞壁玲子(2020)The OECD Learning Compass 2030 と学級活動との対応に着目した特別活動でOECD準拠型コンピテンシーを育成するための指導方法。教育実践学研究, 23 : 17-26.

林尚示・安井一郎・鈴木樹 (2018) 特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究 (3) —学級活動を事例として—。東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 69 : 69-79.

石井英貴 (2015) 今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影。日本標準

伊藤亜矢子・松井仁 (2001) 学級風土質問紙の作成。教育心理学研究, 49 : 449-457.

松田智子・阿部秀高(2020) 合意形成・意思決定の力を育む特別活動—学級活動・ロングホームルームの指導を通して—。奈良学園大学紀要, 13 : 87-96.

村上雅之・梅村拓未・高瀬淳也・高橋正年・河本岳哉・中島寿宏 (2021) 教職経験豊富な小学校教師の体育授業における子供へのかかわりに関する研究 : ボール運動単元における教師の発話および子供の振り返りに着目して. 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 71-2 : 295-302.

文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説特別活動編. 東山書房 : 東京.

田嶋裕生・林幸克 (2012) 小学校における学級活動の在り方一言語活動の充実に着目して. 岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究, 14-1 : 79-87.

(受付 : 2021 年 7 月 20 日, 受理 : 2021 年 10 月 11 日)

(Submitted: July 20, 2021; Accepted: October 11, 2021)